

サン＝サーンス／組曲「動物の謝肉祭」

広く親しまれてきた「動物の謝肉祭」は、カミーユ・サン＝サーンス（1835-1921）が 51 歳の年、オーストリアのクルディムという都市の謝肉祭で、友人のチェリストが主催した音楽会のために作曲された。おそらく遊びに満ちた機会音楽として書き上げたためだろう。サン＝サーンスがピアニストとして参加した初演は聴衆を大いに喜ばせたが、彼は「白鳥」をのぞく楽曲の出版を拒んだという。全 14 曲はそれぞれ特定の動物を描くと同時に、既存曲の引用によって典型的な人格を暗示する。2 台ピアノと弦楽合奏による「序奏と獅子王の行進曲」はライオンの咆哮を模倣したようなピアノのトレモロと弦楽のモチーフによる序奏で始まり、ピアノによる獅子王の行進曲へと続く。「雄鶏と雌鶏」はピアノと弦が雄鶏の鳴き声を、クラリネットが元気のよい雌鶏を模している。「らば」は 2 台ピアノによって速いテンポで飛び跳ねる野生の馬を表現。一転して「亀」はピアノが静かに三連符を弾いているところへ、オフバックスの「天国と地獄」のカンカン踊りの音楽が猛烈に遅いテンポで弦によって奏でられ、かめの動きを表す。続いて「象」はユーモラスなワルツ。コントラバスに現れる滑稽な主題がベルリオーズの《ファウストの劫罰》の「風の精の踊り」の引用。さらにメンデルスゾーンの《真夏の夜の夢》からの一節もきこえる。「カンガルー」はテンポを変えながら、2 台のピアノが跳ねる様子をリズムで模倣する。「水族館」は 2 台ピアノのアルペッジョにフルートやグロックンシュピールが加わった、キラキラと涼しげな音楽。続く「耳の長い登場人物」とは批評家のことか。鋭い音とロバの鳴き声を模した音型を 2 部のヴァイオリンで奏でる。「森の奥のカッコー」ではピアノにのせてクラリネットがカッコーの音型を奏で、「大きな鳥かご」ではフルートが飛び交う小鳥を表現。次の「ピアニスト」はアクセントをつけながら不器用に音階練習をする様子。「化石」は冒頭にサン＝サーンス自身の「死の舞踏」のメロディがシロフォンで弾かれ、さらにクラリネットで「大事なタバコ」、ロッシーニの歌劇「セビリアの理髪師」のローナの Aria を引用。どの曲ももはや化石と揶揄している。そしてチェロの独奏が美しい「白鳥」。「終曲」では今までに登場した動物たちが勢ぞろいして、朗らかに終わる

白石美雪

楽器編成

フルート（ピッコロ持ち替え）、クラリネット、グロックンシュピール、シロフォン、ピアノ 2、弦五部 ※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。